

宰府画報

第 29 号

2026 年 1 月  
(令和 8 年)

発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課



バックナンバーはこちらから

## 逸品探訪

福岡市博物館蔵

初夢図

齋藤秋圃作

絹本著色 掛幅装 101.4 × 36.4cm  
嘉永5年(1852)頃

配置する画面構成や、鑑賞者の共感を誘う愉快な雰囲気など、秋圃の持ち味がよく發揮されています。

夢の中身がはっきりしないのは少しもどかしくもありますが、とにかく縁起の良さそうな本作品。見れば幸運のお裾分けがいただける？ かもしれませぬね。(井形栄子)

※本作品は、1/16〜3/15まで九州歴史資料館で開催される企画展「齋藤秋圃 人となりと人物描写の魅力」に出品中。展覧会には《葵氏艶譜》《十二月風俗図絵巻》《鶯替追難図巻》《島原陣図屏風》などとともに、齋藤家資料も複数展示されています。

目覺めたばかりのひとりの男。画面の上方に吹き出しのように描かれているのは、さっきまで彼が見ていた夢でしょう。頭上に張られた注連縄しめなわと枕元に置かれた飾りから、正月の初夢を主題としたものとわかります。

初夢というと「一富士、二鷹、三茄子」がよく知られ、このほかに七福神や日の出、宝船なども連想されます。しかし彼の夢の中にあるのは、笠と杖を持ってどこかへ歩いてゆく人物ひとり（下図）。お伊勢参りなどに向かう旅人でしょうか。よく見ると、この人物の右肩の辺りから、何やら煙が出ているようにも見えます。当時の人ならピンとくる吉夢かもしれず、あるいは何か私的な内容なのかもしれない。

んが、結局のところ夢の内容はわかりません。しかしずれにせよ、主人公の男はガツツポーズさながらに両手を広げ、わーい！と言わんばかりに口をあけて喜んでいます。とにかくよい夢であつたことは間違いないさそうです。

遊郭の人間模様を描いた《葵氏艶譜》<sup>きしえんぶ</sup>や、市井の人々と月々の風物を描いた《十二ヶ月風俗図絵巻》<sup>うそくえつひなず</sup>（九州歴史資料館蔵）、群衆描写が見どころの《鷲追迫儺図巻》<sup>かん</sup>（福岡市博物館蔵）など（いずれも本誌「宰府画報」で過去に紹介した作品です）、齋藤秋圃の作品は人物の生き生きとした表現に大きな魅力があります。81歳の晩年に作られた本作も、描線の勢いこそ若干失われているように見えますが、モチーフをバランスよく



部分拡大

# 調査見聞

## かめたにせいけん 亀谷省軒と吉嗣 拜山

拜山が生涯大切にしていた骨筆には、骨筆が作られた経緯を記す銘文が刻まれています。この銘文を作ったのは対馬出身の漢学者亀谷省軒（1838～1913）です。

### 亀谷省軒

亀谷家は対馬厳原の商家で、一時は大坂で商いを営んでいましたが、対馬に戻り藩主宗氏の財政を助けていた家です。また省軒の祖父の代からは捕鯨業も手掛けていました。

省軒は嫡子でしたが、幼いころから学問を好み、川辺橋亭（？～1837）らに漢学を学んでいました。長じては自作の詩文を大阪にいた広瀬旭莊（1807～1863）に送って添削をしてもらっていました。遂に24歳の時に病と称して家督を弟に譲り、大阪に至って旭莊の門人となりました。江戸に出てからは安井息軒（1799～1876）の三計塾に入りました。省軒31歳の明治2年（1869）、明治政府は大学校を設立し、省軒はその教授に補せられました。翌年には太政官少史に任じられ、修史庶務などを歴任し、

記録局長も務めました。明治6年に辞職しています。以後は上野不忍池近くに塾を開いたり、光風社を興して漢文集『清言』・『育英文範』などを刊行したりしました。没したのは大正2年（1913）1月21日で、76歳でした。

### 省軒と拜山

拜山は明治元年（1868）に倉敷県の書記局に赴任しましたが、大蔵省に配置替えとなり、明治2年からは東京で働くことになりました。上京した後すぐに省軒を訪ねています。また省軒の塾で先生をしたりしていたので、省軒とは親密な付き合いをしていたようです。拜山と省軒とを結びつけたものは不明ですが、拜山も咸宜園で学んで

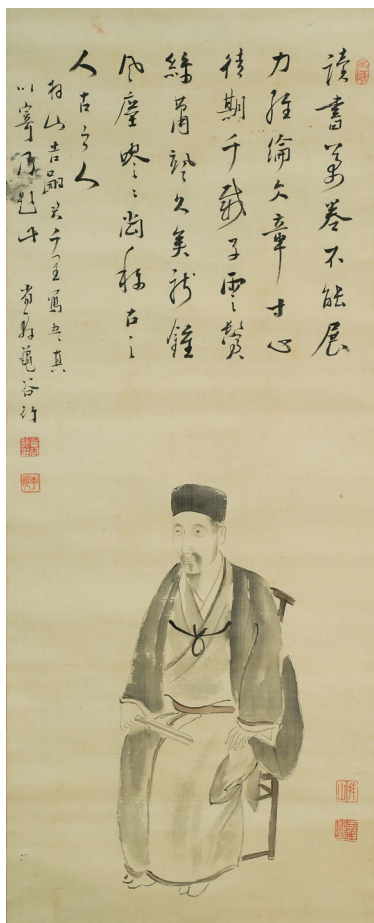
いることから、塾主である広瀬家との繋がりが指摘されています。

### 《亀谷省軒像》について

拜山が省軒を描いた掛け軸が吉嗣家資料の中に収められています。拜山が省軒の座像を描き、省軒が賛文を書いています。『省軒文稿』内に門人の菊池晩香（1859～1923）が描いた肖像画があり、それを見ると省軒の顔は細面だったようで、それをよく捉えて描かれています。省軒の賛文はこう記されています。



亀谷省軒肖像画 菊池晩香の描いた亀谷省軒肖像画  
（『省軒文稿』）



亀谷省軒・吉嗣拜山《亀谷省軒像》 吉嗣家資料

「読書万卷、不能展力経綸、文章寸心、徒期千載。子雲鬢絲蕭颯久矣、新鐘風塵嚶々、尚称古之人、古之人。」（万卷の書を読んでも、現実の政治で手腕を振るうことができず、ただ文章に想いを託して千年の後の理解を待つばかりである。揚雄（子雲）のように白髪混じりとなって久しいが、騒がしい俗世の中で、自分はなおも「古の賢者（理想の人物）」を目指そうと自らを鼓舞している）

子雲とは古代中国の漢代の学者揚雄のことです。揚雄は、若い頃から学問に没頭していましたが、当時の流行だった派手な文章を否定し、難解な哲学書を書いたため、存命中はほとんど理解されず、極めて貧しい生活を送っていました。そのため、漢詩文の中に出てくる「子雲」には「才能があるのに世間に認められない孤独な知識人」という自嘲が込められることが多いようです。省軒は自身を揚雄になぞらえて、西洋化していく時流に流されずに漢学に励むことに強い思いを抱いていたのでしよう。（木本拓哉）

### 【参考文献】

- 亀谷省軒『省軒文稿』一・二（榎原文盛堂、1902年10月、国立国会図書館デジタルコレクション）
- 辺士名朝邦「亀谷省軒―その生涯と漢詩文―」（『活水論文集』第28集 日本文学科編、活水女子大学・短期大学、1985年3月）
- 長尾直茂「吉嗣拜山年譜考證」（勉誠出版、2015年11月）

いちまい

画 稿 鑑 賞

齋藤家資料

## 梅花の精

齋藤家資料の「中国諸画手控」に、「羅浮春夢」と墨書するいちまいがあります。この画稿には、左袖を口元にあてて右の方をみやる女性と、その視線のさきの、梅の大樹にもたれて眠る人物とが描かれています。

金井紫雲編『東洋画題綜覧』は「羅浮仙」の項で、柳宗元撰「龍城録」を典拠として、つぎのような故事を紹介しています。

むかし、梅の名所でもある羅浮山を訪れた趙師雄は、黄昏時に白衣の女性



紙本墨画 仮綴 27.0 × 39.0cm

に誘われて林間の酒家にはいり、ともに杯をかさねて愉快にすごし、やがて眠りに落ちました。夜明け方近く、すべては消え去ります。満開の梅樹の下にひとりめざめた師雄は、かの女性は梅花の精であつたと悟るのです。

「中国諸画手控」は鈴木芙蓉の画譜『画図醉芙蓉』を写したものです。芙蓉は信濃国の人、江戸に出て儒学や絵画を学び、壮年の頃に阿波徳島藩の絵師となりました(村沢武夫『鈴木芙蓉伝』)。この経歴に秋圃が心をとめたかどうかはわかりませんが、『画図醉芙蓉』所収の人物図につよい関心を抱いたことは、山水図は除いて人物図を写していることから明らかです。とりわけこの画稿は、構図も細部も『画図醉芙蓉』の趙師雄の図をきわめて忠実に写しています。

ただ女性の顔だけが異なり、この世ならざる存在ではなくこの世の佳人の表情となっています。そのあたにかみある顔貌表現は、秋圃の人物画の多くに認められるものと通ずるようになっています。(小林法子)

メイショ  
メイブツ

## 王城神社の石造物

大宰府市通古賀には、事代主命(恵比寿神)を祭神とし、古くから信仰される王城神社があります。神武天皇が四王寺山に城を築いた際に建立し、後の天智天皇4年(665年)に大野城を築く際に、この地に移つたと伝わります。境内には近世から近代に設置された石造物が点在し、その中に吉嗣鼓山が揮毫したと分かるものが2点あります。

一つが大正15年(1926)に行われた本殿改築を記念した「神殿改築記念碑」です。石碑側面に「吉嗣鼓山書之」とあり、裏面には本殿改築にあつた寄附者や関係者の名前が記されます。もう一つは社殿の前にある注連柱です。昭和2年(1927)3月に陶山仁八という人物が奉納したもので、揮毫

者の名は記されていませんが、左側柱の文字の下に微かに鼓山の落款が確認できます。文字も他の揮毫で見られるものと同じで鼓山の揮毫したものと判断できます。正面向かつて右側は「百霊滋景祚」、左側は「萬土慶維新」と記され、多くの魂・人民の吉兆が増え、維新を祝い喜ぶという意味とされます。唐の政治家である許敬宗の元日を祝う漢詩が典拠になります。

大正15年12月25日に天皇が崩御し、翌日から元号が昭和になったため、昭和2年は新元号の祝賀行事が全国的に行われました。これらの石造物は、大正から昭和への改元の時期の神社の歴史と改元の足跡を物語る文化遺産といえます。(木村純也)



上：神殿改築記念碑 下：注連柱

関係者  
名鑑

Vol.9

むらたとうほ  
村田東圃

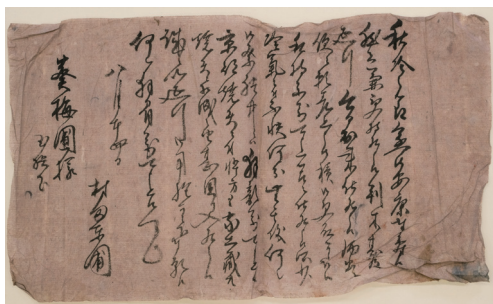
生没年 享和2〜元治2 (1802〜65)  
関係者 齋藤秋圃・梅圃

プロフィール

江戸時代後期の福岡の絵師。字は子壁。紫溟釣徒、墨江遊人の別号あり。齋藤秋圃、桑原鳳井、石丸春牛とならぶ、いわゆる筑前四大画家の一人に数えられる。南画風の山水図を得意としたといい、絵馬も多く手がけた。

村田東圃は、那珂郡春吉村（現在の福岡市中央区春吉）の農家の末子として生まれ、はじめ狩野派や齋藤秋圃に絵を学んだと伝わります。40歳頃に博多の文具商・村田治右衛門の婿養子となつて村田姓となりました。妻の千哥は裁縫刺繍が得意で、刀も達者、製墨の技も身につけた、才気ある人だったそうです。東圃は一時家族とともに京都へ出て活動しましたが、のち再び福岡へ戻り、この地で64年の生涯を閉じました。明治期に京都で画家として大成した村田香谷は東圃の子です。

東圃がいつ頃齋藤秋圃に師事したのかはわかりませんが、秋圃の京都旅行記「京遊日記」（天保5年〔1834〕、齋藤家資料）には、秋圃が博多で東圃の家に立ち寄ったことが記されていて、両者のたしかな交友が確認できます。



村田東圃書状（齋藤梅圃宛）

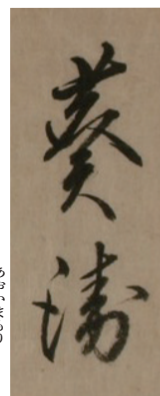
紙本墨書 14.9 × 26.9cm 齋藤家資料

参考：春山育次郎『筑前画家村田東圃略伝』（大正8年〔1919〕、大熊浅次郎『春山育次郎三周年忌法要記事』（1932年）所収、国立国会図書館デジタルコレクション公開）

さて、左写真の資料は、東圃から秋圃の子・梅圃に宛てた書状です。依頼品の「判木」が遅くなったことを詫びる内容で、本資料により東圃と梅圃にも親交があったことがわかります。文中には、「京都焼失」のために家の土蔵も焼けてしまったと書かれています。これが元治元年（1864）7月に起こった京都市大火のことと思われ、8月24日付の本状が火事から間もない頃に書かれたものと推察されます。齋藤家資料に残るこの書状は、村田東圃の京都での動向を伝える、とても貴重な資料です。（井形栄子）

ひとこと  
くずし字

葵 衛



齋藤秋圃は、自らを「葵衛」と称していました。父方の祖母が葵殿と呼ばれていた、あるいは母方の親類が二葉葵を神紋とする上賀茂神社にゆかりがあったため、秋圃は葵姓を使用したと考えられます。

「葵」の部首は草かんむりです。葵の上半分「艸」はアルファベットの「z」、点、「又」に簡略化されてくずされています。

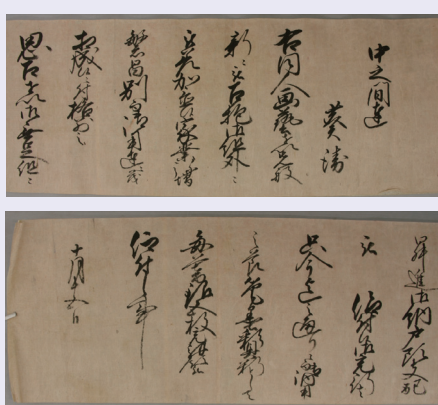
「衛」の部首は行構えです。「イ」は「i」に横線を加えたようなかたちでくずしています。「章」は上側を横棒三つと縦棒に簡略化し、下半分は「刀」のようになっています。「丁」は点一つに省略されています。

この字が収められるのは、文化2（1805）年10月に秋月藩の中間（差出人が詰める部屋）から秋圃へ出された達状です。秋圃の仕事が繁昌しているため、藩主の計らいにより御無足組に昇進させ、藩主の出納管理を司る御納戸頭を命じています。さらに、藩

主の依頼に対応するため、筆墨彩具料として毎年銀5枚を渡すことが記されます。

秋圃はこの年の7月から秋月藩に雇われていました。雇用から3か月での昇進を示すこの文書からは秋圃の活躍ぶりと、藩主の黒田長舒からの信頼がうかがえます。（長野晃久）

この資料



〔中之間達〕 15.0 × 74.8cm 齋藤家資料

編集後記

2020年に開始した「宰府画報」もあつというまに丸6年経過しました。今年も年4号変わらずお届けします。（木）

初夢に富士、鷹、茄子を見たことある人ってどのくらいいるのでしょうか？そもそも茄子の夢ってどんな夢…？（井）